



診察室の午後

白浜はまゆう病院
泌尿器科部長 川嶋 秀紀

和歌浦の病院に入院していた父が逝ったのは、10年前の秋のことであった。脳梗塞が原因で言葉が少々不自由になっていた父は、誤嚥(ごえん)が原因の肺炎の後、徐々に衰弱し帰らぬ人となった。「みなさん前、自分を納得させるように、自分は80歳をすぎたまでもう十分に生きさせてもらいたと言っていた。

葬儀には、私たち家族や親戚のほかに、父の友人や父と親交のあった人たちが大勢が参列してくださった。通夜式開始前には、集まった人々はいくつかのグループとなって、ホールのあちこちで、お茶を飲みながら

〈36〉 蕪村の追悼歌

遊ぶ岡の辺なんぞかく悲しき、たんぼの黄になすな
の白う咲きたる見る人ぞなき」ここから先は思い出せない。作者は蕪村だったよ
うな気がした。高校生のころ、現代国語の時間に習った。「俳句という定型詩の作家が、西洋文学が入ってくるはるか以前に、近代詩とも言えるこの歌を詠んだ」と先生が言われたことを覚えている。

父と二人の最後の夜が白むころ、父と過ごした日々が思い出されるとともに、悲しみがこみ上げてきた。その研ぎ澄まされた感情の中で、突然ある一節が思い出された。「君あしたに去りぬゆづべのこころ千々(ちぢ)に何ぞ遥かなる君を思つて岡の辺に行きつ

出棺の時が来た。父の友人や同級生、ゆかりの人たちが多く見送る中、私は喪主のあいさつで、30年以上の時を超えて突然思い出されたこの追悼歌の冒頭を、思わず紹介した。
後日、母のもとに、父の士官学校の同期生で葬儀に参列してくださった方より

手紙が届いた。その中で、生前の父がしのばれ感無量であったこと、追悼歌が自分たちの今の気持ちを語っていること、それは、蕪村が、親交のあった結城の俳人、早見晋我の死を悼んで詠んだ「北寿老仙を悼む」というものであることが書かれ、さらに、全文が付されていた。その末尾は「我庵のあみだ仏ともし火もものせず、花もまいらせず(ごす)と佇(たたず)める今宵は、ことに尊き」と結ばれている。

歳を重ねると、お盆前には、亡くなった祖父母や父のことが、以前にも増して思い出されるようになってくるようだ。実家のお仏壇に明かりをともし、お花を供えてお参りするとともに、お墓の掃除に行きついで、お墓のお花を供えたいと思